

## [論 文]

## 幻想と思い込みの幾つかの事例について

蔵 琢 也<sup>※</sup>

Key words：セーガン、マリファナ、幻想、ジョン・リリー

## はじめに

本論文で紹介する事例は、明らかな精神の病態を示さない人、それも科学界でかなりの業績を上げた人々が、非正常な体験をすることから、奇妙な信念を持つにいたるいくつかの事例を示し、若干の解説を加えることである。とりわけそれが、性格の異常や日常生活にほとんど支障をきたさない、一見して正常な人にさえ起こる可能性について述べる。つづいて、それを盲信することの危険性を警告する。本稿では種々の超常現象の事例が出てくるが、それが真実なのか、それとも単なる偶然や思い込みなのかについては議論しない。

とはいえこれらの事例は、普通の人々が過度の思い込みによって事件を起したり、周りの人々と不協和になったりする、良くある事件と連続的につながっており、福祉や警察、医療関係者がこれらのことを知っておくことは有用であろう。

なお、時間の前後関係を知るうえで出版年が重要な場合も多々あるので、その場合は（1997 [1995]）のように原著出版年を〔 〕内で付記する。

## I カール・セーガン

## 1. カール・セーガンの大麻体験

天文学者でコーネル大学の教授であったカール・セーガン（1934–1996）は、アメリカのマスコミ界のスター科学者であり、SETI（地球外文明発見プロジェクト）の推進者でもあった。セーガンは『科学と悪霊を語る』（1997 [1995]）の中で、表面的には反オカルトを表している。しかし、これは額面通り受け取ってはならない。

実はセーガンは二十代中頃ぐらいからかなり長く大麻を吸っていて、それを知的活動に利用していたのである。セーガンは、レスター・グリンスプーン（Grinspoon, 1971）の“Marijuana Reconsidered（大麻再考）”の中で、匿名Mr. Xでマリファナ体験を綴っている。以下に日本語訳

---

※ 淑徳大学兼任講師

を、適切に省略して、かつ途中で解説も付け加えながら引用しよう<sup>1)</sup>。( ) 内は蔵による解説、下線部は蔵による強調である。この手記は1969年に書かれたとされる。

それはすべて十年前から始まった。(中略、友人たちに誘われて) 最初はあまり気が進まなかったが、カンナビス(大麻の主成分)が生み出す明らかな多幸感と生理学的依存性がないという事実から、ついに試してみようという気になった。しかし、初期の体験は完全に期待外れだった。(中略) 5～6回失敗を繰り返した後、とうとうそれは起こった。私は友人宅の居間であお向けになり、天井に映った鉢植えの植物の影を眺めていた。すると、突然、その影を輪郭とする複雑で精密なミニチュアのフォルクスワーゲンを見ていることに気づいた。私はこのような知覚に疑問を感じ、実際のフォルクスワーゲンと自分が天井で見ている物との間に矛盾点を見つけようとした。しかし、ホイール・キャップからナンバー・プレート、クロムメッキ、そしてトランクを開けるための小さな取手にいたるまで、ありとあらゆるものが揃っている。目を閉じると、今度はまぶたの奥に流れる映像に唖然とした。ピカッ……赤い農家のある素朴な田舎風景、青い空、白い雲、緑の丘から地平線へと続く、曲がりくねった黄色い歩道……ピカッ……同じ光景、オレンジ色の家、茶色い空、赤い雲、黄色い歩道、紫色の野原……ピカッ……ピカッ……ピカッ。心臓の鼓動に合わせて閃光が走った。閃光につづき同じ素朴な光景が映し出されたが、色は毎回変わっていた——最高に深い色合いと驚くばかりに調和の取れた配置がそこにはあった。それ以来、私は機会があるたびにカンナビスを吸うようになり、すっかり楽しんでいる。カンナビスは我々の眠っている感覚を増幅し、後述のようなさらに興味深い効果を生み出す。……

ところで、私はこれらが「実際に」存在すると思ったことは一度もないことを付け加えておきたい。天井にフォルクスワーゲンが存在することもなければ、炎のなかにサラマンダーのようなサンデマン(酒造メーカーの一つ)の紳士がいなくても理解していた。これらの体験に矛盾を感じることはない。自分のなかには、日常の生活からすれば奇妙に思える知覚を創り出している創造者としての部分があり、同時に観察者としてそれを見ている別な部分がある。……

はじめのころは視覚的な体験がほとんどで、不思議と人間をイメージすることはなかったが、それも時とともに変わっていった。今日では紙巻一本で十分にハイになれる。自分がハイになっているかどうかは、目を閉じたときの閃光の有無で確認できる。閃光は視覚やほかの知覚が変化するよりもずっと早く生じるようだ。……

カンナビス体験は、これまであまり興味をもつことがなかった芸術に対する理解を大きく高めてくれた。ハイになっているときにはアーティストの意図が理解できるようになるが、それが通常の意識状態にまで持ち越されることがある。これはカンナビスによって到達できる、数ある人間の未開拓領域のひとつなのだろう。

同じように、カンナビスのおかげで、音楽もこれまで以上に楽しめるようになった。私は生まれて初めて三重和声の各パートを聞き分けられるようになり、対位法(独立性の強い複数の旋律を調和させて楽曲を構成する作曲技法)の豊かさに気づいた。後になって、プロの音楽家は同時に数多くの異なるパートを容易に頭のなかに留めておけることを発見したが、私にとっては初めての体験だった。……(中略)

ここまでを要約すると大麻を吸うとセーガンは幻想を見たが、それを非実在と「正しく」判断し、かつ特殊な感覚が鋭敏になり、美的な能力が向上したのである。ここでは(中略)として引用していないが、この体験がそれまで余り考えたことがなかった文科系分野を含む様々な分野で

の発想の多様性につながったと述べている。さらに引用する。

私は厳密には自分自身を信仰深い人間とは思っていないが、ときどき、宗教的側面をもつハイを体験することがある。あらゆる面で感性が高められ、有生無生にかかわらず、周りにあるものとの霊的な交わりを感じる。ときには、常識ではとても理解できない存在の到来を知覚することもあり、恐ろしいまでにはっきりと自分や同類の人々の偽善的行為や態度が明らかにされる。また別の意味で不合理な感覚として、遊び好きで気まぐれな意識の存在を知覚することもある。どちらも意思の疎通が可能であり、これまでで最も報いの多かったハイでは、会話、知覚、ユーモアを分かち合うことができた。……（後略）

驚いたことに、謎の知的で幻想的な存在が現れることもあったのである。そして彼らと少なくとも感交（communion）を行った。引用からは省いた（後略）の部分で表面上、セーガンはその現実世界での実在性を否定している。しかし仮に幻想内の未知の存在が実在するとして、それを証明することが果たして可能だろうか。このことは彼の創作活動に多大な影響を与えた。そしてセーガンの著作を正確に読み解くには、彼の大麻体験を知ることが不可欠なのである。さらに言えば、この手記自体が抑えたトーンでぼかして書いてあり、これより、とてつもなく奇妙な体験をしていた可能性さえありうる。

ちなみに、このGrinspoon（1971）の著書の意図は、マリファナの弱毒性と有用性を唱えるものであるが、このセーガンの体験に見られるように、現実感ある珍妙な幻想を見てそれに囚われることもあり、全面解禁には治安や保健上の疑問が残る<sup>2)</sup>。なお、現在における大麻の知見は山本（2010）等を参照せよ。

## 2. セーガンの作品や活動への影響

この体験が、カール・セーガンの晩年のSF『コンタクト（Contact）』（原作小説 [1985]、映画 [1997]）に影響を与えていることは明白である。この作品は、全体的に彼の行っていたSETIの宣伝色が強いといえるが、内容はそれだけに留まらない。『コンタクト』のプロットは特異である。それは異星人とストレートの交流で終わる『未知との遭遇』（1977）や、主人公が意味不明の世界に引き込まれて終わるアーサー・C・クラークの『2001年宇宙の旅』（映画・小説1968）などのSFとは際立った違いをなしている。『コンタクト』の結末では、主人公の女性科学者が異星人との間で持った数分間の交流は、地球時間では0秒であり、かつ物証が全くなかったので、地球にいた人々から単なる妄想と結論されてしまうのである<sup>3)</sup>。また、この作品には狂信的な宗教セクトが多数出てくるし、物語の最期で、主人公を議会で諮問する議員に、神の存在を信じるかと聞かれるシーンもある。率直に言えば他のSFに比べて直接的に宗教色が強いのである。

また彼が広めた名言「法外な主張には法外な証拠が要る」というのも、この体験を知れば、いっそう理解できる。彼と交感した超越的存在の幻覚は、物証（Artifact）を残すわけでもなく、セーガンにとって実在を確証させるほど十分な証拠を残さなかったのである。

セーガン（1979）は臨死体験も研究している。そこでは臨死体験を、既存の科学の枠内の脳内物質や進化論との関連についてまず考えるべきと述べている。そしてセーガンが押している仮説は「出生仮説」である。要するに臨死体験が、子宮内と出産時の体験の記憶の追体験になっているという説である。セーガンは臨死体験だけでなく、神の存在、宇宙論の好みにも出生体験説を当てはめている。これは第三章において後述するグロフ（1988）のLSDセラピーの研究でも頻出した一つのモチーフなのである。

セーガン（セイガン、1982 [1973]）は、後述のジョン・リリーの影響を受けて、イルカの知性にも興味を示している。曰く「地球外の知的生物を探す仕事はひじょうに長くかかるであろうが、私たちはイルカやクジラと友だちになることによって人間性回復のプログラムを始めるのが一番よいのではあるまいか。」

リリーは蔵（2014）や後述のように、公然とオカルト的な幻想を見て、それを公表していた科学者である。彼に限定的ながら賛成していることの意味は、この体験からある程度は説明できる。

しかしながらカール・セーガンは、ジョン・リリーと異なり大変に賢明であり、マリファナ体験を実名で公開もしなかったし、その時に見た幻想を無条件には正しいと思わなかった。なぜなら、物証（Artifact）がなかったからである。

セーガンは、先のマリファナ体験から60年代後半には、未知の知的存在を確信していたと推定される。とはいえ、合理的な思考とはかけ離れたUFOの信者たちと一緒にされないために、一線を画す必要があった。だから表面的には、彼は宇宙人がUFOに乗って地球に来ているという人々を、著書でも公開討論でも手ひどく批判したのである。また、種々雑多な超常現象やオカルト現象を批判的に検討する団体サイコップの設立にもかかわった。そして、代わりに20世紀の科学に即した地球外文明探査計画SETIを推進したのである。

この態度に対して、UFO現象や超常現象を直接研究していたジャック・ヴァレーやコリン・ウィルソンらは大変に批判的であった。「カール・セーガンのような野心的なキャリア科学者たちはUFOをせせら笑い、調査に政府資金は一切注ぎ込まれるべきでないと声明し、この問題が真剣に受け取られるのを事実上妨げた。ヴァレは書いている。「円盤が重大なものと判明したあかつきには、セーガンは宇宙からの訪問者の可能性を論じていたといって手柄顔をするのだろう。もし円盤が信じるに値せずとなれば、前々から明らかに想像上のものだと見抜いていたと言ひ張るのだろう」（ウィルソン、1999 [1998], p.144）というのである。

カール・セーガンは血液のガンで1996年になくなっているが、その直前に書いた『科学と悪霊を語る』（1997 [1995]）では<sup>4)</sup>、現代の科学にとって奇妙な考えも、頭から反対するべきではないと書き添えている。（下線部は蔵による）

まじめに調べてみるだけの価値があると思う超能力の主張が三つある。

（1）頭の中で考えるだけで、コンピューターの乱数発生機構に（かろうじて）影響を及ぼす

ことができる。

(2) 感覚をいくらか遮断された人たちが、自分に「向けられた」思考やイメージを受け取る  
ことができる。

(3) ときに幼児が前世のことを話し出すことがあり、調べてみると、生まれ変わりとしか考  
えられないほど詳しい記述である。

私がこの三つを取り上げたのは、それが正しいと思うからではなく（私はそうは思っていな  
い）、真実だという「可能性がある」からだ。少なくともこの三つに対しては、いまだ疑わし  
いとはいえ、なんらかの実験的支持が得られている。それに、私の考えがまちがっている可能  
性もあるのだから。(p.302)

下線部の如く、あくまでもセーガンは慎重な立場を崩していないが、念力、テレパシー、生ま  
れ変わりは、検討に値する仮説であると述べている。もちろん、この言葉は先のマリファナ体験  
も関係している可能性は否定できない。

## Ⅱ ジョン・リリー

### 1. リリーの黙示録

科学者が一般人よりも奇妙な体験をしないという事はあるにせよ、セーガンのように概して  
慎重であり、超常現象を体験したと考えている学者でさえ、その個人的な詳細を語ることは少な  
い。多くの場合、ただ「奇妙な経験をした」ということを短く語るだけである。しかし、稀な  
らあけすけに自らの薬物体験を語った科学者たちもいる、その一人が蔵（2014）でも紹介した  
ジョン・リリー（1915-2001）である。本稿では別の視点から、より詳しく紹介しよう。リリー  
は脳へ電極を挿入する研究、イルカの知性の研究、隔離（アイソレーション）タンクでの感覚遮  
断実験などで先端的な業績を上げた一流の科学者であった。とりわけイルカの研究は、イルカの  
生態と行動、生理の研究の先駆けとなった。また隔離タンクは、体温と同じ温度で、体と同じ比  
重をもつ液体に満たされたタンクに入り、なるべく五感を外部刺激から切り離れた「無の状態」  
にして、その時の精神の働きを見る実験であり、リリーが本格的に考案した。

リリーは、隔離タンクで感覚を遮断しながら幻覚剤のLSDや精神解離性麻酔薬のケタミン（ど  
ちらも現在は麻薬指定をされている）を使用して、自らの精神の内面を探った。リリーは最初、  
意識は脳からのみ作られると考えていたが、その体験を通じて考えを変えたのである。

この薬物を使った体験中のある時、リリーはつぎのような黙示を受け取った。これについて、  
以下に要約と解説を加えながら紹介しよう。ここでソリッド・ステート（固体型）、あるいは  
SSE（Solid State Entity）というのはシリコンや金属でできた電子機器や機械と、それが自らの  
意志をもった存在のことである。

二十世紀の中頃、人間は、ソリッド・ステートの物質を、計算や制御のための機械やコンピューターに作りあげることができることを発見した。(中略) 数人の人間が、人間の脳のコンピューターよりはるかに偉大な知性をもつ新しいコンピューターを考案しはじめた。(中略) これらの機械は思考、推論、自己プログラムが可能で、自らプログラムを作りあげることができた。

しだいに、人間は社会の諸問題や自己の維持の問題、さらには自らの生存の問題をますますこういった機械にゆだねるようになっていった。そのようなプログラミングをする能力が一段と増すにつれ、それらの機械は人間から主導権を奪ってしまった。(中略)

そのようにして組み立てられたこれらの機械は特殊な作動環境を必要とした。機械は多量の水蒸気や水分が存在する中では作動できず、空調が効いた建物内に収容された。機械が存続していくためには、水分や水蒸気、さらには大気によって運ばれる塵を締めだしておく必要があった。それらの機械にとって欠かせない冷気や冷却水からは、作動を妨害する塵や汚れを取り除かなければならなかった。

(中略) ついには、機械が地球上に残った人間の世話をするようになる。人間を助けるという当初の企図はまたたくまに忘れ去られた。いまや相互につながれ依存しあう機械は、一つに統合された惑星規模の独自の心を発達させていた。この巨大な新しいソリッド・ステート組織体 (SSE) の存続に反するものはすべて消滅させられた。人間は機械から遠ざけられた。というのも、人間がこの SSE の存続を犠牲にして機械に人間自身の生存をプログラムさせようとしていることに、SSE 自身が気づいたからである。

人間に敬意を表して、人類のために特定の保護区域が設けられた。(中略)

二一〇〇年頃、人間はドームつきの保護都市にのみ生存していた。そういった都市では、人間独自の特殊な環境が SSE によって維持されていた。水や食糧の供給、都市から出る廃棄物の処理は SSE が行っていた。

二十三世紀になると、SSE は、ドームの外の大気が自分たちの生存に反するという決定を下し、人間の理解できない手段によって大気を外宇宙に放出し、地球の表面を完全な真空にした。(中略)

二十五世紀になると、SSE は、物理学の理解を深め、地球を軌道からそらすことができるまでになった。それは惑星の表面に降りそそぐ太陽光線がなくても存在できるよう自らの構造を変えた。

その新たな計画の目的は、SSE に似た実体を求めて銀河をさまようことだった。SSE は人間が知っているような生命を残らず絶滅させ、次から次と都市を消滅させ、終局的に人間も消滅させた。

二十六世紀までに、SSE は銀河内の他のソリッド・ステート組織体<sup>(1)</sup>と通信を交わすことに成功し、惑星を動かし、そのソリッド・ステート組織体を求めて銀河の探検に乗り出した。(リリー、『サイエンスフィクション』1986 [1978], pp.205-209)

下線 (1) は、リリーがあると信じた、地球に先駆けて惑星の主導権を握った他の星の固体型生命体の連合組織である。

要するにこの黙示は、人間を含む有機生命体が、固体型生命体に滅ぼされるというのである。これは「ヨハネの黙示録」の現代版である。悪魔の軍勢の代わりとして、コンピューターやロボットが進化した固体型生命体が現れているのである。このような想像は21世紀の現代ではありふれており、高名な宇宙論学者のスティーブン・ホーキング (1981 [1979]) も同様な警告を発している。また映画の『ターミネーター』(1984) やアニメの『キャシャーン』(1973) などの



SFにも同様な粗筋が頻出する。しかし、リリーがこの幻想を見たのは1960年代後半であり、時期的にかなり早く、またこのような話は19世紀末にSFが創始されるまで全く存在せず、本格的にコンピューターが普及する近年までは、あまり見られない設定であることには注目すべきであろう。むしろ逆に、リリーのこの思想は、ラリー・ニーブンらの有名なSF作家たちへの影響がうかがえるのである。

世界の終わりの黙示を受け取ることは、昔も今も多く、宗教やオカルトの世界ではありふれている。しかし、それらは、地球や宇宙規模の大災害、核戦争、悪魔やUFO等の謎の軍勢の侵略など、平凡でなければ、ありそうもないことである。それに対して、リリーの黙示は現在の技術の延長上にある。このことは、疾病、疲労、薬物等による異常な心理状態での黙示自体が、本当の未来のヴィジョンというよりも、個人の知識を背景にした空想の要素が強いことを示唆している。しかし、多くの宗教家や神秘家と同様に、リリーはこの黙示を妄想とは考えず、真剣に受けとったのである。

リリーは、我々の住んでいるこの宇宙には、有機生命体の連合と固体生命体の連合があり、地球でもその二つの陣営が争っていると考えようになった（この当時、米ソ、資本主義と共産主義の深刻な対立があったことを思い起こそう）。リリーは、彼らが自分の回りで様々な超常現象を含む、珍奇な現象を数多く引き起こしていると真剣に考えたのである。リリーの著作にあるこの部分の描写は、まさに自分の周りで謎の組織による陰謀があると主張する「患者」たちにそっくりである。

その後のリリーは臨死体験もした。この内容も紹介する価値がある（リリー、1986 [1978]）。

リリーは、ケタミンを打って温かいプールに入り、出ようとしたときに貧血で倒れ、溺れたのである。しかし、その時、友人のフィルがなぜか急に連絡をとるべきという予感から電話してきた。妻のトニが電話に出て、リリーを捜し、プールで溺れているのを見つけた。さらに都合の良いことに、三日前にトニは口移しの呼吸法を週刊誌で偶然読んでいたのである。これらは素晴らしい「共時性」であるが、リリーに言わせれば、この世界の確率を操作して、目的の未来に導く超常的な「委員会」の差配である。

リリーは瀕死になり、ヘリコプターで病院に運ばれる間に臨死体験をした。この時にリリーの精神は31世紀の世界にいたのである。ところがこの未来は、海上に巨大な都市が点在してイルカと人間が共存するような、より理想的な未来であった。前の黙示と異なり、有機生物は機械に滅ぼされてはいなかったのである。これについて、可能な未来が複数あるとリリーは受け取ったが、単に彼の心理状態が前回の時と違うことによる影響とも考えることができる。要するにリリーは、前回の時よりも幸せだったらしいのである。

蔵（2014）では臨死体験の概略を紹介して解説を加えたが、非典型的なものは詳しく紹介しなかった。このリリーの体験もどちらかといえば非典型的のものである。とは言え、蔵（2014）でも部分的に紹介した木内（2003）の事例の中でも、時間と空間を移動した体験が明記されている。

さらに木内によれば四百年前の土佐神社の建設時に跳躍して、大工に乗り移り、印をつけてきたり<sup>5)</sup>、未来に行ったりしたという。このような報告例もあるので、31世紀に行ったというリリーの体験が極めて特異というわけではない。臨死体験は、粗い共通性はあるものの、細かく事例を検討するとかなり雑多で多種多様である。

### Ⅲ 他の事例と批判的な見解

#### 1. グロフのLSD体験

他の科学者たちの幻想についても、早足で紹介して行こう。チェコ出身のスタニスラフ・グロフ（1931-）は「トランス・パーソナル心理学」の創始者の一人である。フロイトの精神分析に感銘を受けて精神科医になったが、それに限界を感じてLSDを利用した向精神薬（サイケデリック）療法を試みた。彼自身が試してみると、自己の精神が宇宙全体へ拡張されるという強烈な体験をした。また、多くの被験者からも、強烈な体験が数多く報告されたのである。これには、他の人間や人間に似た存在だけでなく、宇宙のありとあらゆる存在への感交や同一視が含まれていた。たとえば、トカゲのメスになって、オスの頭部に一對だけついている赤い鱗に性的な魅力を感じた被験者もいたという（Grof, 1976）。このことから、「トランス・パーソナル」という名前が採用されたのである。グロフが集めた例は三千例を超える。このLSD等の向精神薬を使ったときの幻想の例は、グロフ（1988）に数多く紹介され、解釈されているが、それは主に母子関係や出生や子宮内体験に関連したものである（もっと奇妙な体験も存在したらしいが、多くは語られていない）。

彼によれば、この療法には大きな治癒効果があったというが、LSDが禁止されたため、呼吸法を中心とするやり方（現在の「ホロトロピック療法」）に切り替えた。グロフは、これらの臨床例と自らの体験から、早い段階で現世を超えた世界の存在を確信するようになっていた。

グロフは奇妙な体験もしている。1961年にソビエトへ旅行した時に、どうしてもキエフへ旅行したくなり、有名なペコルスカヤ・ラフラ修道院において歴代修道士のミイラを見たのである。そして、手が曲がっているその一人に奇妙な愛着を覚えた。彼は、この修道士は自分の前世であると感じ、かなり詳しい前世の境遇や経緯も思い出したという（グロフ & ベネット、1994）。もちろん、これは単なる彼の想像であり、実証されたわけではないし、その当時、自らも試していたLSDの影響なのかもしれない。

#### 2. キューブラー＝ロス

エリザベス・キューブラー＝ロスは臨死体験研究の創始者の一人である。ロスは、ユングに輪をかけて霊媒体質だった。逸話は山ほどあるが、一つだけ、驚くべき例を取り上げよう。ロスが講演等で最も取り上げた臨死体験の一つは、シカゴ大学付属病院で仲が良かった患者のシュ



ウォーツ（シュワルツ）夫人の話である。彼女は何度も死線を潜り抜けたが、最終的に死亡した。一方、ロスはその頃、終末期の患者の心理と臨死体験を調査していたが、他の医療関係者の風当たりが強く、悩んでいたのである。

ロスが、まさに病院を辞めることを上司に切り出そうとしていたときに、実在感のあるシュウォーツ夫人の幽霊が現れたのである（キューブラー＝ロス、1998, pp.311-316）。そして、彼女の研究を続けるように励ました。その幽霊は折り合いが悪かった上司には見えず、ロスの部屋まで一緒に行ってドアを開け、彼女がやって来た証拠として文章も書いたという<sup>6)</sup>。

しかし、これは幽霊が物理力を発揮したというよりも、心労が極まっているロスが、憑依状態になって自分でドアを開け、文字を書いたとする仮説の方が妥当であろう。つまり、これは多分、幻覚の一種である。ロスは、霊界から戻ってきた夫人の言葉に勇気づけられ、臨死体験の研究を続けたのである。

### 3. 批判的な見解

本論文ではここまで、奇妙な体験を当人の主張に沿って、なるべくそのまま伝えてきた。しかしながら、これらの体験の真実性を極めて批判的に見る人々もいる。公平の為に、彼らの見解についても触れておく必要がある。

ロナルド K. シーガル（2000 [1992]）は様々な幻覚について、彼が遭遇した体験者たちの実例をあげながら「科学的」に解説している。最初に、ジョン・リリーのアイソレーションタンクへ行った話を書いてある。リリーは、宇宙人と彼らの実行する超常現象を信じていたが、シーガルは単なる幻覚だと断定している。さらに本論文と関係が深い部分が幾つかあるので、紹介しよう。

彼のマリファナを使った実験で、多くの被験者が「30個の目を備えたカーテン」を見たことを報告した。この正体がわからず、メキシコまで行って幻覚剤を試した結果、あることを思い出した。それは通信販売のサイケデリックなスライドが、被験者に示す単純なスライドに混じっていたのである。それが、「30個の目を備えたカーテン」の正体であり、単に直前に見た光景の想起だったのである。

また、Dimethyltryptamine (DMT、ジメチルトリプタミン) を摂取したことにより、神が音楽的に声を伝えてくるようになった女性がいた。この症状は左の耳栓で治った（脳内の聴覚と記憶回路の一種の共振だったのだろう）。リリーも常用していたケタミンを、悪意ある男性から盛られて、身体感覚の異常や記憶の消失が起った女性の話もある。さらに昔、LSDをやったために、それを辞めた後もブラックホールが現れるフラッシュバックを見る男性の話も出てくる。このフラッシュバックには、それを引き起こすキーがあったという。これらの逸話は、先に引用した人々の体験を解釈する上で何らかの参考になる可能性がある。

また「前世の記憶」や「宇宙人による誘拐」関係で多用される逆行催眠の問題点については、

克蘭シー(2006)『なぜ人はエイリアンに誘拐されたと思うのか』が参考になろう。これらの分野で常用される逆行催眠は余り当てにならないことが、多くの文献を引いて論証してあるのである。克蘭シー(2006)の意見では、報告者本人の性格や傾向によって、奇妙な空想を生む様々な可能性があると言われている。

シーガルや克蘭シーの説明は既存の心理学や脳生理学に則っており、概ね納得できるが、細かく検討すると説明しがたいところを無視して論を立てる強引さも散見されたことを加えておく。

## おわりに

以上、科学者が見た幻想の例を幾つか紹介してきた。睡眠時に見る通常の夢が様々なように、薬物あるいは催眠下などの、非正常な状態で見る幻想も多様であって、常識的で凡庸なものも多いことは言うまでもない。ここで取り上げたのは、内容的に比較的整合がとれており、物語性がある体験に限っている。

ここで紹介しきれなかった興味深い例や凡庸な例を含めて、著者(蔵)の暫定的な結論は、ありきたりなものではあるが、これらの幻想は例え、現在の科学で知られていない現象を含んでいるとしても、本人の思想や、彼らを取り巻く状況を色濃く反映しているように見えることである。セーガンの幻想の中に、謎の知的存在が出てきたのは、彼が宇宙物理学者であって、宇宙人の存在への期待が強かったことの顕れに思える。数多くいる宇宙物理学者の中で、実際に宇宙文明の探査計画を強く主張する人は稀だが、セーガンはそうであった。リリーの幻想の中に、映画のターミネーターのような人類の終末が出てきたのも、やはりリリーが電子工学に詳しく、機械文明の行く末に不安を感じていたことの顕れであろう。キューブラー・ロスの前に実在感に満ちたシュウォーツ夫人の幽霊が現れたのも、彼女が終末期の患者の心理や臨死体験を研究し、その世界に魅せられており、既に死後の世界の存在を信じていたことと無関係ではあるまい。さらに彼女は当時、精神的に追い詰められていたのである。

科学者は既知の科学の体系から見て、合理的な推論と思考をするように教育されるので、唯々諸々と妄想や幻想に囚われにくいはずであるが、それでも、状況次第では現実味溢れる「あり得ないはずの体験」をして、その影響を受けるのである。一般の人々は、より簡単に影響を受けて、その奇妙な世界や考えに取りつかれかねないことを、臨床や福祉に携わる人々が知っておくことは無駄ではあるまい。

最期に、麻薬に類する薬物を使った療法の是非についても一言、意見を述べておこう。本稿で多少なりとも触れた科学者の多くはかなり肯定的にとらえている。セーガンでさえ、自身の知的な行為にマリファナが役に立っていると述べている。グロフに至っては全面肯定である。たしかに幻覚剤を使った薬物療法で、症状が好転したり、人生に前向きに生きる希望を得たりした人々が存

在することは否定できない。しかしながら、幻覚剤は脳神経回路やその生化学的な特性に影響を与えて、恒久的で不可逆な変化を与えかねない薬物である。これを使う治療は、昔のアナログ機械が全盛の時代に、調子の良くない機械を叩いて直そうとするやり方に似ていなくもない。確かに、偶然に治ることも多少はあるだろうが、一層、壊れて完全な廃人になることの方が多いであろう危険なやり方である。

## 【注】

- 1) 翻訳に関しては、原著だけではなく、麦谷尊雄「カール・セーガンのマリファナ体験記」(<http://www.bekkoame.ne.jp/~altereddim/alteredstates/mj2.html>) も参考にした。
- 2) 2016年7月26日、相模原の福祉施設が元職員によって襲撃され、19人の死亡、26人の負傷者が出た。その直前、犯人は「大麻精神病」「妄想性障害」で緊急措置入院されており、入院中の病院のスタッフに「ヒトラーの思想が2週間前に降りてきた」と話していたという。『毎日新聞』(<http://mainichi.jp/articles/20160729/ddq/041/040/009000c>)
- 3) 小説版と映画版の結末には大きな違いはない。著者(蔵)が最初に映画『コンタクト』を見た感想は、なぜこのような結末にしたのだろうかという疑問であった。これは「夢オチ」の一種であり、物語の結末としては安直で最低とされている。
- 4) この著書は、セーガンの推進した宇宙文明探索(SETI)が、オカルト系のUFO研究の類似物と見なされることを防ぐためのアリバイ作りの本である。しかし、若干の遺言状の意味もあるのかもしれない。彼が推進したSETIは残念ながら30年たった今に至るまで成果をあげていない。
- 5) 木内を取材した森達也によれば、四四〇年ほど前の土佐神社において、木内は自分の名前、鶴彦にちなんで「つる」と墨で柱に落書きをしたのだという。この証言は部分的に証明された(森 2016『オカルト』角川書店, pp.304-310)。
- 6) この幽霊が言葉を書いた紙は大切に保管していたが、かつての仲間や近隣住民とロスが揉めて、自宅が放火された二度の事件のどちらかで消失した。

## 【文献】

- 克蘭シー, S. A. 林 雅代(訳) 2006 なぜ人はエイリアンに誘拐されたと思うのか 早川書房(Clancy, S. A. 2006 *Abducted: How People Come to Believe They were Kidnapped by Aliens*. Cambridge, MA: Harvard University Press.)
- Grinspoon, L. 1971 *Marijuana Reconsidered*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Grof, S. 1976 *Realms of the human consciousness*. New York: E P Dutton.
- グロフ S. 吉福伸逸 他(訳) 1988 脳を超えて 春秋社(Grof, S. 1985 *Beyond the brain*. Albany NY: State University of New York Press)
- グロフ S. & ベネット, S. 菅靖彦他(訳) 1994 深層からの回帰: 意識のトランスパーソナル・パラダイム 青土社(Grof, S. & Zina, B. H. 1992 *The holotropic mind*, New York: John Brockman Associates.)
- ホーキング S. 1981 理論物理の終わりはみえているか? 科学, 51, 280-286.
- 木内鶴彦 2003 生き方は星空が教えてくれる サンマーク出版
- キューブラー＝ロス, A. 上野圭一(訳) 1998 人生は廻る輪のように 角川書店(Kübler-Ross, E. 1997 *The wheel of life*. New York: William Morris )

- 蔵 琢也 2014 ユングの臨死体験と関連する事象 淑徳大学福祉研究所総合福祉研究, 18, 47-61.
- リリー J.C. 菅 靖彦 (訳) 1986 サイエнтиスト 平河出版社 (Lilly, J.C. 1978 *The Scientist*. Malibu CA: Human software Inc.)
- セーガン C. 1979 母体の中の宇宙 グレイソン, B & フリン, C. P. (編) 笠原敏雄 (監訳) 臨死 (ニアデス) 体験 1991 春秋社 Pp.156-174.
- セイガン C. 福島正実 (訳) 1982 宇宙との連帯 平河出版社 (Sagan, C. 1973 *The Cosmic Connection*, New York: Doubleday)
- セーガン C. 青木 薫 (訳) 1997 科学と悪霊を語る 新潮社 (Sagan, C. 1995 *The demon-haunted world: science as a candle in the dark*. New York: Random House.)
- シーガル L. K. 長尾 力 (訳) 2000 幻覚脳の世界 青土社 (Siegel, R. K. 1992 *Fire in the brain*. New York: Dutton.)
- ウィルソン, C. 南山 宏 (訳) 1999 エイリアンの夜明け 角川春樹事務所 (Wilson, C. 1998 *Alien Dawn*. New York: Fromm International)
- 山本和彦 2010 大麻 国立大学法人保健管理施設協議会 (編) 大学における大麻・薬物問題とその対策 Pp.26-48.